

浜松城と徳川家康

山下 航

要旨：本論文では、城郭史にみる浜松城の位置づけを、発掘成果や地方史料などから考察するにあたって、以下の3つの論点に注目する。

まず1つ目は、浜松城の立地の悪さについてである。浜松城の歴史や見付（磐田）との比較を通じて浜松という土地の弱さを指摘した。2つ目は、浜松城天守の有無とその姿である。堀尾時代に建てられた天守については、浜松城跡24次調査により、その実在が認められた。また、堀尾が建てた松江城の様式が浜松城の姿を知る鍵になることが分かった。3つ目は、浜松城が冷遇された事実についてである。浜松は家康ゆかりの地のひとつとして大変有名であるが、駿府などと比べると城としての格がやや低い。駿府はその守りやすさから、今川、豊臣、徳川といった権力者たちが要衝としてきた。西国ににらみを利かせるには絶好の場所であり、浜松にはそのような位置づけが与えられなかったのである。

キーワード：浜松城、駿府城、徳川家康、天守（天守閣）

第1章 浜松城の立地の悪さ

浜松城は、三方原台地の東南端に位置し、天竜川によってつくられた河岸段丘上にある。江戸時代には、浜松宿を貫通する東海道が、西から見れば、城の大手門前で直角に東へ曲がっていた。1568年（永禄11）12月、三河国の雄、徳川家康は遠江国侵入を開始した。それから約1年半後の1570年（元亀元）6月、家康は岡崎から引馬城（浜松）に入城し、本格的な遠江国の経営に着手していった。見付（磐田）を拠点に遠江を支配したかった家康は、信長の「もし、信玄と敵対した場合、お主が見付にいたら、天竜川が邪魔になって救援に向かうことができない。たとえ渡ることができたとしても、川を背にすることになる。お主の居城は浜松にしろ。」¹という命令により、苦渋の決断の末、浜松を拠点とすることになった。この命令には、信長のとある思惑があった。それは同盟を解消した場合のことである。見付に城を築かれてしまえば天竜川が邪魔になり簡単には攻めることができないのである。逆に浜松に城を築かせることができれば、家康が天竜川を背にすることになるので、背水の陣となり、攻めやすくなる。後年、家康は、次のようにこぼしたと『前橋酒井家旧蔵聞書』に記されている。「信長に属する前に、まずは信玄についておけばよかった。そうすれば、信長も、わしのことを、もう少し大切にしてくれたのに。」信長の未来を見据えた命令が現在の浜松城のルーツとなった。

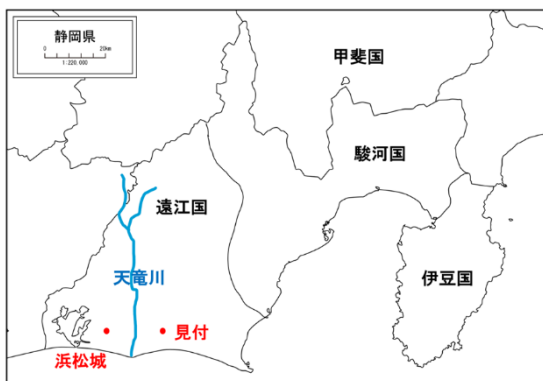
では、見付と浜松では何が変わってくるのだろうか。それは、軍事拠点としての強さ

¹ 奥田1978, p.27; 磯田道史「浜松の発展は信長の命令から始まる」(『広報はままつ「家康公エピソード」 磯田道史のちょっと家康み』); <https://www.tokugawa-bushotai.jp/episode/ep01/>

である。見付は、もともと律令時代に遠江国の国府（国衙）が置かれた土地であり、鎌倉時代には国衙と守護所が置かれ、中世の東海道では屈指の規模を持つ宿場町でもあった。一方浜松は、今は、海から遠い蜷塚遺跡だが、その貝塚は縄文時代に佐鳴湖が海につながる入り江だったことを伝えている²。蜷塚遺跡のすぐそばにも、海面がせまっていたことが想像できるので、浜松城が建っている場所は砂丘であったと考えられる。浜松という地名をさかのぼると、浜松市伊場遺跡で奈良時代の遠江国敷知郡の役所跡を発掘した際に、「濱津」と記した木簡が出土し、奈良時代には濱津という地名だったことが確定した（浜松市博 1992）。その後、鎌倉幕府が成立し、京都と鎌倉を結ぶ東海道を行き来する旅人が増加したことから、当時の東海道が天竜川（現在の馬込川付近）を渡る水陸交通の結節点に位置し、市を開くのにも適した引間宿が栄えた。現在も船越や早馬という地名が見られるのは、その名残である。

このことから分かるように、浜松は本来城を建てるのに適している場所ではなかったのである。したがって家康は、砂丘の上に本格的な城を作るという考えはないので、いわゆる城郭をつくらず、石垣や瓦葺建物のない中世的な城を作ったようだ³。家康は、引馬城を基点に領域を西側に拡張し、家臣団を城下の各所に配置して、商工業者を集住させた。城下町は南に大きく広がり、引馬宿とは異なる新たな城下町が出現した。近世の浜松宿のシンボルである浜松城は、ここに創築期を迎える。

浜松城の前身である引馬城は、現在の東照宮付近一帯の小規模な丘陵地に位置する。15 世紀代に築城されたとみられ、15 世紀末～16 世紀代の遺物が出土している⁴。また、引馬城の東側には中世東海道の宿場町として引馬宿が栄えていた。引馬城築城時の城主は不明であるが、16 世紀前半には今川氏配下の飯尾氏が城主を務めていた。そして家康が西側の丘陵一帯へ範囲を拡張して浜松城と名付けた。当時の浜松城は高い石垣や天守はなく土造りの城であった⁵。家康は、天正年間までかけて作左曲輪までの大拡張工事を実施した。三の丸をはじめ南のほうへ城を拡大させ城下町を整備したのは、その後に入場した大名たちである。



² 浜松市「蜷塚遺跡の貝塚」；

<https://www.city.hamamatsu.shizuoka.jp/hamahaku/04smzkap/kaizuka.html>

（2023 年 2 月 17 日閲覧；以下同）

³ 『浜松城跡』11, p.3；<https://sitereports.nabunken.go.jp/ja/35956>

⁴ 『浜松城跡』11, p.44；<https://sitereports.nabunken.go.jp/ja/35956>

⁵ 浜松城公園（本丸南広場）解説看板について；

<https://www.city.hamamatsu.shizuoka.jp/kouen/honnmaruminami.html>



浜松市文化財課「徳川家康在城期復元図(CG)」

第2章 浜松城天守の有無、浜松城天守の姿

次に、論争のある天守の有無と、いまだ明らかにされていない天守の姿について考察していく。天守とは、城郭にあって本丸の要所に建つ。天守、天主、殿守ともいう。城中における最高の櫓で、城主の指揮所として中枢の位置を占めるとともに、接見・物見・貯蔵の機能をあわせもち、井戸もある。1520年（永正17）、摂津（現兵庫県）伊丹城にあった天守をその始まりというが、尾張（現愛知県）楽田城天守を古いとする説もある。村田修三 2017 によると、天守の起源をめぐって、文献に表れた天守の最も古い所見として、生島宗竹が書いた軍記物『細川両家記』には、1520年（永正17）頃の伊丹城に天守が存在したとされるが、傍証はなく実際に天守と呼称されていたかも不明であるとしている。また、作成年代は未詳であるが、古老の記憶を記述した小瀬甫庵の『遺老物語』巻八「永禄以来出来初之事」によれば、1558年（永禄元）の楽田城には高さ5m程の基壇上に二階櫓が築かれ神仏を祀り、それが殿守と呼ばれていたとされる。但しこちらも傍証はない。どちらも後世の記述であり、信憑性の論証は難しい。日記等による年代が明らかなものとして、吉田兼見の『兼見卿記』にみえる1572年（元亀3）坂本城の「天主」の記述である。『兼見卿記』には、この他坂本城より時代は下るが、高槻城、足利義昭の室町第（花の御所）にも「天主」の記述がみえる。以降、『信長公記』、『駒井日記』、『多聞院日記』をはじめとしたさまざまな文献に散見されるようになる。ところが、これらの文献の中では「天守」、「天主」、「殿守」、「殿主」などの文字が使われており、統一されたものではない。『信長公記』の1578年（天正6）正月の項、安土城の記述において「天主」が用いられていることから、古い段階では「天主」、時代が降るにしたがって「天守」が用いられる傾向にある。「天守閣」という語が現れるのは明治になってからで、昭和以降になると天守閣（「天主閣」や「殿主閣」なども使われた）という呼称が一般化していった。今日では、1931年（昭和6）に復興された「大阪城天守閣」をはじめ、天守閣と呼ばれることのほうが多いが、後世の俗語のため本稿では「天守」と呼ぶ。

1590 年（天正 18）、浜松城の歴史の中で唯一豊臣系の大名が支配する時代を迎える。豊臣秀吉配下の堀尾吉晴が入城すると、浜松城は現在みられる野面積みの石垣が築かれ、天守をはじめとする瓦葺建物が建築されたと考えられている（太田 1996,p.38）。堀尾吉晴は尾張国の出身。小田原の北条攻めのあと浜松城主となり、現在見られる石垣や天守を築いた。さらに二俣城や鳥羽山城も改修し、家康が築いた戦国の城を近世城郭へと大きく豹変させ、豊臣政権の天下を世に知らしめた。その後、出雲・隠岐国の国持大名へと出世し、松江城を築城する（同上,p.40）。浜松城の天守の有無については論争があったが、浜松城跡 24 次調査により、堀尾時代の浜松城に巨大な建造物があったことを証明する遺構が見つかった⁶。浜松城跡 24 次調査では、天守曲輪内を 4 か所発掘調査しており、浜松城跡 23 次調査（2018 年 1 月～3 月）で確認された、瓦が大量に集積した瓦溜りと、石塁の詳細な状況⁷を確認することを目的としており、調査によって石塁の形や瓦溜りの詳細な状況が明らかになった。また、天守曲輪南東部に、絵図面には描かれていない櫓の存在が初めて確認された。見つかったのは、安土桃山時代の櫓の基礎と考えられる遺構と、屋根の軒に葺かれる模様が入った軒瓦、屋根の頂部に葺かれる鯨瓦である。瓦の製作技法や模様の特徴が、すべて堀尾吉晴が城主であった頃のものであることからこの時期に巨大な建造物があったことが明らかとなった。遺構から推定される櫓の規模は南北 10 メートル、東西 7 メートルほどの 2 階建てという巨大なもので、高い城壁に囲まれて門や櫓、天守などが重層的に配された浜松城の姿が浮かび上がる発見となった。浜松城跡 24 次調査で発掘調査された天守曲輪は掛川城（静岡県）や和歌山城（和歌山県）などにも見られるが、類例は決して多くない。掛川城や和歌山城は豊臣秀吉と関わりが深い人物が築城しており、天守曲輪は秀吉と深く関わる遺構ともいえる。



浜松城跡 24 次調査発掘調査現地説明会資料より

⁶ <https://www.city.hamamatsu.shizuoka.jp/bunkazai/iseki/isekir1.html> ; 浜松市教育委員会 2019 参照。

⁷ <https://www.city.hamamatsu.shizuoka.jp/bunkazai/iseki/iseki29/index.html> ; 浜松市教育委員会 2019 参照。

堀尾吉晴は出雲・隠岐国の国持大名へと出世し、松江城を築城する。その姿は浜松城と似ていたとみられ、浜松城の天守を参考にしたとも考えられている（太田 1996,p.40）。浜松城の整備、改修は堀尾吉晴の意図によるだけでなく、背後には豊臣秀吉がいて、東海の諸城について共通する方針があつて掛川城のように同時に変革させている。浜松市の文化財課は今までの発掘調査をもとに浜松城のコンピューター・グラフィックス（以下、CG）復元図を制作した⁸。私は正直その CG 復元図はかなり盛って作られているのではないかと思う。堀尾期の遺構だけ今まで見つからなかったことにも違和感を覚える。再現された CG 復元図のような壮麗な天守があつたのに対し、出土品の数があまりにも少ない。今や地域教材として多く取り入れられる点から考えると、ただの観光シンボルとしてだけでなく、再建された城や天守は史実に忠実でなければならぬまい。浜松城は、CG 復元図とまではいかないが、松江城に近い城であつたことが想像できる。堀尾吉晴入城の 10 年後、関ヶ原の戦いで勝利した家康は、いよいよ天下人として全国を掌握する。浜松城を含む東海の城には、譜代の有力大名が交代で配置された。豊臣色を残す天守はこの時に廃棄されたのかもしれない。



松江城



浜松城



浜松城 CG 復元図

⁸ 浜松市市民部文化財課；

<https://www.city.hamamatsu.shizuoka.jp/shise/koho/koho/hodohappyo/2021/7/1201.html>

第3章 冷遇された浜松城

最後に、浜松城は何故冷遇されてしまったのかを、駿府との比較で明らかにしていく。

静岡県は徳川家康ゆかりの地として有名であるが、駿府城や掛川城と比べたときに浜松城だけは冷遇されていたように思われる。掛川城を見てみると、山内一豊転封後、掛川城には有力譜代大名が配置された。松平家は定勝・定行・定綱と三代にわたり城主となっている。徳川幕府黎明期の松平家父子の配置は、天下経営にとって掛川城を重要視していたことがうかがえる。家康は1605年（慶長10）9月京都から江戸へ帰る途中に掛川城に立ち寄ったり、定勝の子や嫁を気にかけていたりするなど、掛川藩と深くかかわっていたことは明らかである。また、1615年（元和元）の武家諸法度と一国一城令発布による厳格な統制が始まる中、一門親藩以外使用禁止とされていた三つ葉葵紋が使用されていたことも、東海における城郭の中でも掛川を重要視していた城郭の一つであることを物語っている（高橋2020による）。

また幕府の交通政策を考えると、東海道ではとくに3代将軍家光の寛永年間が重要な画期となっている。1635年（寛永12）に武家諸法度が改正され、諸大名の参勤交代が制度化された。その街道の一つとして東海道が挙げられ、西国の諸大名が掛川城を何度も目にしていたのは間違いない。掛川が徳川によって支配されていることを示すために、家紋瓦が用いられるようになった。山内一豊創建時は三つ巴紋が使われており、これは他の豊臣系と共通していたが、松平在城期は三つ葉葵の紋が入った瓦を使用しており、正保～慶安時代に変えられたとされる（同上）。この時代は武家諸法度の条文に「諸国居城修補を為すと雖も必ず言上すべし。況や新儀の構営、堅く停止せしむる事」と書かれ、改修に関しても規制が厳しくなっている中で、遠江の諸城が一斉に家紋瓦を変えていることは、幕府の意図が絡んでいると読み取れる。

浜松城は家康が天下を取る過程で築き要衝とした場所であるのにもかかわらず、江戸時代に入ると高力忠房、太田資宗、青山宗俊、松平資俊といった大名が置かれた⁹。本来なら駿府城のように代官を置くべきところであり、幕府直轄領にすべきところであった。関ヶ原の戦い後の徳川時代に豊臣系の城は次々に取り壊され、それは浜松城も例外ではなかった。しかし、駿府城は豊臣の天守を壊して新しい天守をつくった（小和田1992）。駿府の守りやすい土地を、今川、豊臣、徳川は重視した。駿府は歴史的に要衝とされた。徳川幕府の天下普請による築城は、江戸城、駿府城、名古屋城の三城だけであり、駿府城が幕藩体制の確立のための直轄の拠点へ位置付けられ、いかに重要視されていたかを物語っている（同上）。

駿府の地は、薩埵峠から安倍川が作る扇状地帯の中央に位置し、東海道において西から東への動きを止める要衝であったので、家康にとって浜松城とは根本的に城の位置づけが違っていた。また、駿府は静岡平野の中で最も標高が高く安倍川に近いにもかかわらず賤機山丘陵によって川の流れが導かれているため、直接的な川の影響が少ないという好条件を兼ね揃えている。このことは家康による駿府城築城と駿府城下町の形成に大きく関わっている。

⁹ 浜松城の歴史；<https://www.city.hamamatsu.shizuoka.jp/documents/90967/p67.pdf>

家康は幼いころ、今川氏の人質として過ごした 11 年間の、今川期駿府の繁栄ぶりと今川館の存在を基盤に、自らの手による居城と城下町の建設にあたった（小和田 1992）。駿府は大手門を西向きに開き、久能山東照宮の神廟（墓）も家康の命により西向きに作られており¹⁰、西ににらみをきかせて背後の江戸を守っていた。大手とは城の正面、あるいは敵の正面を攻撃する軍勢という意味で、大手門はそこに建つ門のことを指す¹¹。いわばその城の正門にあたる。この大手門が西側を向いているということは、西方にいる豊臣を意識し、戦いが起きた際は一番に迎え撃つという姿勢をとっているかのようである。また、神廟が西向きに建っている理由に関しては諸説あるが、「都の帝に敬意を払うため」や「生誕の地である故郷の岡崎を望むため」というのが一般的な考察である。しかし、西国大名との関係を視野に入れて考慮すると、監視の意図があったことは明白である。家康は 1616 年（元和 2）4 月に死去したが、まだ大坂の陣が収束したばかりで徳川支配が確立したとは言えない時期である。江戸幕府の西国統治に不安を抱き、死後も西国を監視するために、西側を向いて神廟を建立するよう遺命を残したとしても納得できる（高橋 2020 による）。このような駿府に比べて、浜松はそのような位置づけを与えられなかったのである。駿府石垣の家紋はみな西国大名のもので、西国からの攻撃を防ぐ石垣を西国大名（池田輝政、有馬豊氏、前田利長、毛利輝元など）に作らせていた（小和田 1992）。

関ヶ原の戦いに勝ち全国を支配下に置いたとはいえ東西の対立関係を残す不安定な政治・社会情勢の中で、家康自身による駿府城の築城と駿府の町の整備は、徳川家にとってもその将来を決めた、歴史的な判断として高く評価されている（同上）。慶長年間の駿府城築城の経過を見てみると、幕府の基礎を構築するために、威信をかけ、総力を挙げての天下普請が開始されたことが分かる。徳川幕府の天下普請による築城は、江戸城、駿府城、名古屋城の三城だけであり（同上）、駿府城が幕藩体制の確立のための直轄の拠点へ位置づけられ、いかに重要視されていたかを物語っている。単なる隠居後の家康の居城というイメージが言い伝えられ広く解釈されているが、近世初期の駿府城築城、それに一体化して整備される駿府城下町の形成経過を歴史的に見れば、戦略上の前線の拠点として、常に緊張状態にある城塞都市駿府というのが本当の顔であり、さらにのちの大御所政治に見る国際都市駿府という広く世界を見極め対応していくという活力を秘めた都市、それが駿府であるという認識が必要である（同上）。

これらのことから、家康ゆかりの地として知られる、岡崎、駿府、浜松で家康を取りあう論争にひとつの区切りがついたのではないだろうか。

参考文献

- ・太田好治『浜松城跡』（浜松市教育委員会、1996 年）
- ・小和田哲男『図説・遠江の城』（郷土出版社、1994 年）
- ・小和田哲男『図説・駿河・伊豆の城』（郷土出版社、1992 年）
- ・村田修三『織豊系城郭とは何か - その成果と課題 - 』（サンライズ出版、2017 年）

¹⁰ 久能山東照宮ホームページ；<https://www.toshogu.or.jp/worship/precincts.php>

¹¹ 日本国語大辞典；<https://kotobank.jp/word/%E5%A4%A7%E6%89%8B-450261>

- ・ 三浦正幸『図説近世城郭の作事 天守編』（原書房、2022 年）
- ・ 守屋穀『日本を創った人びと 16 徳川家康』（平凡社、1978 年）
- ・ 高橋樹『掛川城天守復元の史料による考察』（常葉大学教育学部卒業論文、2020 年）
- ・ 浜松市教育委員会『浜松城跡 13』（浜松市教育委員会、2019 年）
- ・ 浜松市博物館『図説浜松市の歴史』（浜松市博物館、1992 年）
- ・ 奥田寛『浜松城物語』（東海電子印刷株式会社、1978 年）